

## エレクトロニクス先端融合領域若手研究者育成プログラム (実施期間：平成 21～25 年度)

実施機関：豊橋技術科学大学（総括責任者：大西 隆（榊 佳之））

### プロジェクトの概要

独創的な若手研究者育成のためにテニュアトラック制度による人材養成システム改革を実施する。G-COE 研究の発展的拠点としてエレクトロニクス先端融合研究センターを設立し、応用分野とセンシング技術を複眼的に見渡せるエレクトロニクス先端融合領域で人材を養成し、従来の学科中心の人材養成システムを改革する。また研究推進環境を整備し、ポストは国際公募とし、採用審査は国内外の専門家を含めて公正に行う。事業終了後、学長裁量ポストで、テニュアを採用し自主的人材育成を行うと共に、テニュアトラック制度を拡充整備していく。テニュア取得後は研究能力向上のために再審査や既に導入されているサバティカル制度を活用する。

### (1) 評価結果

総合評価	目標達成度	国際公募・選考・業績評価	人材養成システム改革 (制度設計に基づく実施内容・実績)	人材養成システム改革 (制度設計に対するマネジメント)	実施期間終了後における取組	中間評価の反映
A	a	a	a	a	a	a

総合評価： A（所期の計画と同等の取組が行われている）

### (2) 評価コメント

機関の特長ある分野の「センシング技術」、「半導体技術」、「フォトニクス技術」など、優れたエレクトロニクス先端技術を医学・医療、農学・農業や情報・通信などの「先端知」と融合させ、次の時代を見据えた新しい境界・融合領域を切り拓く人材養成にテニュアトラック制（以下、「TT 制」という）を位置づけ、優秀なテニュアトラック若手研究者（以下、「TT 若手」という）を准教授と助教に採用し、外国籍、女性研究者の採用目標を満たすなど、目標とする人材養成に成功していることは評価できる。特に、養成システムにおいて、「ランチコロキウム」やワンフロアインタラクティブ研究環境などのアイデアを用いて、効果的な人材育成を行い、TT 若手も優秀な成果をあげており、また、学内の TT 制への理解の下、学長のイニシアティブにより全学へ TT 制を普及させていることは評価できる。

- ・ **目標達成度**：人材養成の目標を明確にし、異分野融合により新たな技術科学の研究活動の活性化を推進するための若手研究者の育成を目標として TT 制を導入し、エレクトロニクス先端技術の開発と応用を担う境界・融合領域を切り拓く優秀な TT 若手の准教授と助教の採用に成功し、また、外国籍、女性研究者の採用目標も満たしており、効果的な人材養成システムの構築は、当初の目標を十分に達成し、TT 制の継続につなげていることは評価できる。
- ・ **国際公募・選考・業績評価**：国際公募は適切に行われ、7 回にわたる公募では、順次工夫を加え、応募者も多く、また、採用審査は多段階にわたるプロセスを踏み、公平性・透明性を

十分に確保した審査体制となっていることは評価できる。女性研究者、外国籍研究者の採用数値目標の20%に達成しており、多様な人材の確保に成功している。年次評価・中間評価も適正・厳格に行われ、TT若手が優秀な業績を上げていることは、養成環境が十分に整備されたものとして評価できる。

- **制度設計に基づく実施内容・実績**：TT制を活かす制度設計に工夫が見られ、新設された「エレクトロニクス先端融合研究所」へのTT若手の配置や、ワンフロアインタラクティブ研究室設置などで、異分野融合や自立性の確保と展開を推進しており、効果的な影響をもたらしている。また、「ランチコロキア」と称する交流企画は、支援室のサポートもあり十分機能しており、若手研究者の養成と機関内への制度理解を高める工夫は、TT制の定着につながっており、評価できる。
- **制度設計に対するマネジメント**：プロジェクトの遂行、人事システムや制度の改革などについて、学長、人事委員会が主導してPDCAサイクルが有効に活用されている。特に、TT制の全学展開について、学長のリーダーシップの下、学長裁量でポストと研究費が確保され、5つの系に対して適用される新たに部局型TT制の導入につながる成果を生み出しているなど、適切なマネジメント体制は評価できる。
- **実施期間終了後における取組**：既に全学人事委員会で全学へのTT制の導入が決定されており、2つのTT制（拠点型：「エレクトロニクス先端融合研究所」に常時5名程度で運用、部局型：系ごとに年1名の5年で1サイクル）を並列的に動かすことが決められており、学長のリーダーシップの下でTT制が継続されていることは評価できる。
- **中間評価の反映**：中間評価でのコメントへの対応は適切に行われている。